

アフリカ狩猟採集民のシャーマニズム

今村 薫

はじめに

シャーマンとは、シベリアに広く居住するマンシュール・ツングース系語族の中心的な呪術—宗教的職能者サマンに由来し、シャーマニズムはもともと、シベリアの民族宗教であるとされてきた。その後、比較研究がすすみ、東北アジア、南アジア、東南アジアといったアジア全般、さらにラテン・アメリカの諸民族におけるシャーマニズムが次々と指摘されるようになった。しかし、アフリカでのシャーマニズム研究は少なく、とくに、狩猟採集民におけるシャーマニズムの研究は、シベリアの狩猟採集民との比較が必要であるにもかかわらず、皆無に等しい。

シャーマンとは、「諸精霊を統御し、これら(諸精霊)を意のままに自らに導入でき、そして諸精霊にたいする自らの力を自らの利益のために、とりわけ諸精霊によって悩まされている他の人々を助けるために行使できる男性および女性双方(Shirokogoroff, 1935)」であり、シャーマニズムの定義のもっとも重要な点は、「超自然的存在との直接接触または直接交流(佐々木宏幹, 1984)」にあるという。

本稿では、アフリカの狩猟採集民サンにおけるシャーマニズムについて報告し、その世界観と身体技法について考察する。

サンはアフリカ南部のカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民である。ブッシュマンとも呼ばれ

る。彼らは多くの言語グループにわかれており、異なる言語グループ間では互いに言葉が通じない場合もある。また、グループごとに、狩猟採集への依存度や習慣が異なり、サン全体がまったく同一の文化を持つとはいえない。しかし、そのような変異の中で、サンたちすべてに共通した心のよりどころであり、かつ狩猟採集民独特の世界観を結集させた「文化の核」にあたるものを一つだけ挙げるとするならば、それはヒーリング・ダンス(治療の踊り)である。サンならば、グループの違いを越えて治療の歌を理解し、ある者は歌い、ある者は手をたたいてリズムを刻み、ある者はそれに合わせて踊ることができる。

彼らは、病人が出ると人々が集まってヒーリング・ダンスを催す。このダンスにおいて、ヒーラー(踊りながら治療する人)たちは踊りの途中でしばしば失神し、トランス状態で悪霊を追い出す。サンたちは、このような独特の治療空間を共同で作出す。また、ヒーリング・ダンスによって、病人が治癒され、キャンプから悪霊が取り除かれるという信念を、サンは共通して持っているのである。

本稿において、私は、サンがおこなうヒーリング・ダンスの全体像を、彼らの生活や世界観と関連づけて描き出したい。具体的には、私が1988年以付き合っているグイとガナというサンの中の二つの言語グループの事例をもとに論考をすすめる。

グイ/ガナのヒーラーは、ヒーリング・ダンス中のトランス状態において激しく神と口論する。なぜなら、人を病気にするのも、病気から人を回復させるのも、すべて神だからである。彼らの社会における「治療」の意味を理解するには、まず、彼らにとって神とはどういう存在であるのかを理解しなければならない。

さらに、ヒーリング・ダンスは、「病気とは何か」という彼らの疾病観の中に位置づけることができる。彼らにとっては、日照りや不猟も「病気」である。また、自分自身の欲望や執着、それによる社会関係のゆがみもまた、「病気」の原因である。そのような、疾病観や災因論の体系の中で、人智を超えた「カミの病」の治療にヒーリング・ダンスが用いられる。

こうして、彼らの宗教観と疾病観の交差した所にヒーリング・ダンスが存在することを示す。しかし、これだけでは、なぜ彼らがダンスによって神と出会い、病気を治すことができるかの説明にはならない。

したがって、本稿の後半では、ダンスや歌が、彼らの社会においては超自然的存在と直接接触する方法であることを示す。「超自然的存在」に人間が接触するには、そのための回路を開いていることが前提となる。この前提には、野生動物と人間が日常的に接触しているという、狩猟採集民の生活が関与しており、サンならではの特殊性を浮き立たせることになるだろう。

しかしながら、ヒーラーがどのように自らの身体をコントロールし、超自然の力を取り入れているかという「身体技法」に注目すれば、彼らのしていることは、それほど特殊なことではないことがわかる。感覚を研ぎ澄まし、呼吸や身体動作を意識的におこなうことで、身体感覚が拡張して自然や他人と一体化し、その一体化

した場において神との直接対峙が可能になるのである。

以上の考察をへて、彼らのヒーリング・ダンスは、人間の世界認識の普遍的な能力を現代社会に照らし出すものであることを示したい。

1. カラハリ狩猟採集民サン

1-1 歴史

サンは、現在はカラハリ砂漠という乾燥地に限定して暮らしているが、かつては東アフリカから南アフリカにかけて広く居住していたことが、化石人骨、石器、居住跡、岩壁画などの証拠から推測されている。彼らは、少なくとも2万年前には、南部アフリカ一帯に住んでいたという。

南部アフリカには、サンとよく似た体型と言語を持つコイコイ（かつてホッテントットと呼ばれた）という民族がいる。彼らは、ともに舌打ちによく似たクリック子音を交えて話し、言語学的に近縁である。また、どちらも小柄でほっそりしており、皮膚の色が黄褐色で頬骨が高く、アジア人に似た容貌を持つ人も多い。

サンとコイコイはかつては同一民族であったが、サンが狩猟採集生活を続けたのに対し、コイコイは紀元前2500年ごろ、エジプトおよびスーダンを起源とする北方の牧畜民の影響を受けて家畜を飼うようになったという。

サンとコイコイは、アフリカ大陸の南半分に広く分布していたが、拡大を続けるバントゥ諸族の南下に押されて、15世紀ごろまでには大陸南端部の砂漠地帯に追いやられた。さらに、そのうえ、17世紀には、ヨーロッパ人の入植者が南から侵入し始め、彼らから土地の収奪や迫害を受けた。現在、サンはボツワナ、ナミビア、アンゴラ、南アフリカにまたがって分布

し、人口はおおよそ10万人と推定される。(サンの歴史については、田中(2008)を参照されたい。)

サンは「ブッシュマン」とも呼ばれるが、これは「藪の中の原始人」を意味する蔑称であるという批判もある。

一方、「サン」という呼び名は、近隣の牧畜民であるコイコイによる他称であり、しかも「家畜を持たない人」「無宿の浮浪者」という軽蔑をこめた言葉である。

しかし、サンにはサン全体を表す自称がない。それゆえ、本稿では苦肉の策であるが、「サン」をカラハリ狩猟採集民全体の呼称に用いる。彼らは、グイ、ガナ、ナロ、クン、コーといった10以上の言語集団からなる。

私が調査をおこなったボツワナ共和国のカデという集落には、グイとガナという二つの言語グループのサンが住んでいた。グイ語とガナ語は方言程度の違いしかなく、互いのコミュニケーションにまったく困らない。近年はグイとガナ間の婚姻も増えてきた。

カラハリの奥地にも近代化の波が押し寄せ、グイとガナも1980年代には、政府によって設置された井戸の周りに定住するようになった。定住地には、学校や診療所、法廷、集会所が整備されている。

また、人々は、道路工事や民芸品製作で現金を得るようになり、トウモロコシ粉や食用油、紅茶、砂糖、また、石鹸や衣料などの日用品を金銭で購入するようになった。病気治療のためのダンスへも、現金が支払われる場合がある。

1-2 平等主義的社会

グイ/ガナは、狩猟で得た肉を、親族やキャンプのメンバー全員に徹底的に分配することが知られている。このような食物分配は、採集し

た植物からなる食物や購入したトウモロコシ粉などを料理したものにも及ぶ。

彼らは、物だけでなく体験をも分かち合う。ヒーリング・ダンスも分配の対象である。ダンスに参加しそびれた人は、「私にダンスを分けなかった」といって他の人々を非難することがある。

彼らの社会にはリーダーがいない。社会的格差も小さい。狩りの得意な者は狩猟の場を、ダンスの得意な者はヒーリング・ダンスの場を取り仕切ることがあっても、その場面限りのリーダーである。男性は狩猟、女性は採集と性別分業もみられるが、男性が採集をおこなうことも、女性が野生動物を捕まえることもある。そもそも職業が分化しておらず、ダンスのうまいヒーラーであっても、普段は狩猟や皮なめしをおこなって生活している。

彼らの社会は、貧富の差もなければ、恒久的なリーダーも存在せず、後述するように神の権威も存在しない。彼らは過酷な自然の中で、ただ「ともに生存するために分かち合う」ことを軸に生きてきたのである。

2. グイ/ガナの世界観

2-1 グイ/ガナの「カミ」

彼らはガマという超越者の存在を信じている。ガマは、この世界を造った創造主であり、人間に悪も善ももたらす。雨を降らせて野生の動植物を育て、人間を狩りでの成功に導くなどの恵みをもたらすのはガマだが、逆に、太陽で大地を干上がらせ、人々を飢えと渇きで苦しめるのもガマである。しかし、ガマは、世界の外側にいる「絶対神」なのではなく、こちら側の世界(人間が認識しうる自然世界と超自然世界からなる)に存在する、他の精霊よりは少しは

力を持っている「カミ」なのである。

彼らの会話に出てくるガマは、もっぱら悪の部分強調される。たとえば、「ガマが身体に入って病気になった」「ガマのせいだ狩りに失敗した」のように、悪いことがおきれば、それはガマの仕業である。そのために、かつて人類学者はガマを「悪霊」「悪魔」と訳していたことさえある。善悪かわからず、人智を超えたこと、あるいは自分の責任にできないことは、すべてガマのせいにする。

だからといって、人々がガマに支配されているわけではない。後で詳述するように、ヒーリング・ダンスにおいて、ヒーラーはトランス状態になり「ガマに会う」が、彼はガマと「口論」し、ガマに病気を治せと「主張」する。ガマと人間はかなり対等である。

2-2 民話の中のカミ

ガマは、昔話や物語に登場するときは、「ピーシツォワゴ」と呼び名を変える。ピーシツォワゴは、創造神的な性格を持つが、同時に、民話の世界でトリックスターといわれる「いたずら者」の地位を与えられている。

たとえば、彼らの居住地を東西に貫く化石化した川床の由来について、「ピーシツォワゴが、狩りの途中で毒蛇に壘丸を咬まれ、痛みに悶え苦しみながら、湖をめざして壘丸を引きずりながら歩いた跡」と民話は語っている。このピーシツォワゴは、湖にたどりつき、水に飛び込んでワニになったという。

このように、民話に出てくるピーシツォワゴは、人間の姿をしたり、動物になったりする。「物語の中の動物たちは、いずれも動物としての特徴を持ちながら、つねに人間の姿として登場し、言葉話す（田中、1994）。」

太陽と月の起源について、私は1990年に以

下の物語を採取した。

昔、ピーシツォワゴはエランドを一頭飼っていた。そのエランドをアカシアの林の中で飼い、アカシアの蜂蜜でエランドを育てていた。

ところがある日、ピーシツォワゴが蜂蜜を採集に行ったすきに、ピーシツォワゴの息子たち（人間）が、そのエランドを食べてしまった。

採集から戻ってきたピーシツォワゴは、エランドが食べられたことに気づき怒った。彼は、解体されたエランドの腸から糞を絞りとり、あたりにまき散らした。それから、口に水を含んで、その糞に吹きかけた。

すると、その糞は、たくさんのエランドに変わった。

ピーシツォワゴは、さらに、アフリカオオノガンの羽根をとって、それを細枝にひっかけて空高く打ち上げた。その羽根は空にとどまって太陽になり、赤く燃えさかって地上のすべてのものを焼き尽くした。

人々は、悶え苦しみ、砂を掘ってその窪みに身を横たえて暑さをしのいだ。それでもその暑さに耐えきれず、人々は大声で泣き叫んだ。

すると、その叫びは木立になり、人々はその木陰で休むことができた。

そして、夜になった。暑さがおさまったので、人々は家に帰ろうと思ったが、真っ暗で何も見えない。それで人々は、地中からガラー（丸くて白い根茎をつける植物）を土中から掘り出し、空に向かって投げた。

その根茎は、空にとどまって月になり、
人々の家路を照らした。

この物語から、カミ（ピーシツォワゴ）と人間の関係がわかる。カミは、創造者であり太陽を創った。太陽は、人間への罰としてこの世界に存在する。実際、グイ/ガナは、太陽をしばしば悪者扱いする。「太陽が、我々を焼き殺す」とは彼らが日常よく口にする言い回しである。

太陽創造の物語は、今日ではゼネーという遊びで再現される。ゼネーは、鳥の羽根に糸でおもりをぶら下げ、その糸を細い枝にひっかけて、羽根つきのように、何度も羽根を空へ打ち上げる遊びである（ただし、ゼネーは一人で遊ぶ）。

大切なエランドを人間に殺されたカミは、おおいに怒った。そして、エランドを殺した人間たちに対抗して、エランドの糞から、たくさんのエランドを創り出してみせた。狩猟動物の腸の中の糞は、以下の疾病観のところで述べるように、「薬」として用いられるような強力な力を持つ。

カミは自分の力を人間に誇示するためにエランドを生みだしたが、それは、結果として人間にエランドをもたらす恵みとなった。エランドは、カラハリ砂漠に生息する大型の羚羊である。脂肪が多く、まるまると太った動物であるが、敏捷で跳躍力にすぐれている。

エランドは、狩猟の肉として好まれるだけでなく、人間の女性の理想形であり、多産を象徴する。少女が初潮を迎えたときにおこなう儀礼を「エランド」と呼び、この儀礼で踊るダンスのことも「エランド」という。右の民話は、エランドはカミが愛でる動物であることを示している。

また、この民話によると、人間はカミの息子

とされ、カミにまでは及ばないまでも、木々や月を創り出す力を持っている。ここでも、カミと人間の立場は対等に近い。

カミに通じる者は、ヒーリング・ダンスで踊るヒーラーと、初潮儀礼中の少女、成人儀礼中の若者である。しかし、彼らは神に仕えることを専門にする「祭司」ではない。

2-3 現実主義者の死生観

現実的なグイ/ガナの人々は、「死後の世界」というものを想定しない。私が「亡くなった人はどうなるのか」と尋ねると、「しばらく砂の中に埋もれている。そのうち砂と混ざり合ってなくなってしまふ」と答えるだけだ。

亡骸は砂に掘った穴に埋め、その穴を埋め戻すときに同じキャンプに住む人々が、砂を一つかみずつ手にとって、穴に投げ込む。これが唯一の儀式である。塞いだ穴の上に少し砂を盛り、それをトゲのついた枝で覆うが、これは、動物に死体を荒らされないためである。

「彼らにとっては、死んだ人のことは、早く忘れ去ることが重要であり、したがって死者の墓を特別なものとして作ることはしないし、それをふたたび訪れるようなこともけっしてない（田中、1978）。」

彼らの死生観において、亡くなった人が子孫に禍福をもたらすことはない。祖先崇拜もおこなわれない。

3. グイ/ガナの疾病観

3-1 自然界との感応

病気の「治療」や「薬」のことをツォーという。初潮儀礼や結婚のときにおこなう儀礼などもツォーというので、彼らにとって、治療と儀礼は同義である。したがって、通過儀礼は、彼

らにとって、「成長にともなって生じる身体の不調への治療」という側面をもつ。(儀礼の詳細については、今村(2010)を参照されたい。)

グイ/ガナは、成長段階に応じて、食べてはいけない動物の肉が決まっている。たとえば、初潮を迎える年齢に達した少女は、クーズーとダイカーの肉を食べてはいけない。初潮が始まると、クーズーとダイカーの肉は食べてもよくなるが、今度はゲムスボック、ステーションボック、ハーテビースト、トビウサギ、ヤマアラシの5種類の動物の肉を食べることが禁じられる。禁じられている肉を食べると、少女が肉に「ナレして」下痢や嘔吐に襲われるといわれる。

「ナレ」はこの文脈では、「食あたりする」と訳せるが、「感知する」という意味で使う場合もある。たとえば、「ハンターは、罠に獲物がかかっていると、罠を見に行く前から自分の腋が燃えるように熱くなり、獲物をナレする」、あるいは、「長期間帰ってこなかった息子が夢に現れ、息子をナレした」のように用いる。私は、ナレを、より広い意味で「感応する」と解釈している。ナレについては後でもう一度考察する。

一年近くにわたる初潮儀礼を終了した少女は、上記の5種類の動物の肉を食べてもよくなる。これらの動物が罠にかかった機会に禁を解く儀礼をおこなう。

まず肉を食べ、それから儀礼(治療)をおこなう。その儀礼では、身体の数か所をカミソリで傷つけ、そこに、「薬」を塗りこめる。「薬」は、薬草と、禁忌であった5種類の動物の糞や毛、蹄を焼き焦がしたものを混ぜ合わせて作る。糞は、地面に落ちているものではダメで、その食べた動物の腸の中にあるものでなければならない。

このような「肉食回避」は、初潮前後の少女

だけでなく、妊娠中の女性、乳幼児や乳幼児の両親、また、成人儀礼中の若者、そして「年寄り」に達しない青壮年の男女が、それぞれの成長段階に決められた動物種についておこなう。また、この回避を解除するたびに儀礼をおこなう。

この肉食回避の儀礼を支える彼らの信念は次のように整理することができる。

- ① 野生動物と人間には相互に感応し合う回路がある。
- ② その回路の存在によって、動物と人間は感応し合うが、人間はその成長段階によっては動物の肉に過敏に反応することがある。
- ③ この「過剰反応」の治療に、動物の「身体物質(身体の周辺にある物質)」を使う。

このような肉食回避は、動物から人間へ向う一方的な影響力が前提になっている。しかし、次に述べる初潮儀礼においては、人間から自然および動物への影響力が強調される。

3-2 初潮儀礼

グイ/ガナの少女は、15~16歳になって初潮を迎えた瞬間から、その後「若い女」に成長するまでの長期間(一年から数年間)、さまざまな儀礼行為や禁忌事項を守らなければならない。これらの長期にわたる一連の儀礼および儀礼に付随する行為の全体が、初潮儀礼である。

初潮儀礼全体に流れる一大テーマは、「少女の影響力」である。儀礼期間中の少女は、人間、動物、自然のすべてに影響を与え、同時に動物と自然から力の行使を受ける。

儀礼中の少女が作った料理は、それを食べた男たちの歯と腹を痛くするといわれ、そのような少女からの「悪影響」を防ぐための儀礼がおこなわれる。しかしまた、少女は弓矢を「治療」して狩猟での成功をもたらす「良い力」も持つ

ており、弓矢に「薬」を塗っては次々と矢を放つ儀礼をおこなう。

一年近くに及ぶ初潮儀礼のうち、もっとも華やかなものは、女性たちが集まって踊る「エランド」である。同じキャンプだけでなく、他のキャンプの女たちも少女を祝福して集まってくる。そして、スカートをめくって大きなお尻を突き出し、臀部と乳房を左右に揺らして誇示しながら踊る。

集まった女の半数は歌い手にまわり、立ったまま手をたたき、甲高い声で「エランド」をうたう。この歌には歌詞はない。あとの半数は踊り手になり、踊りながら一列になって小屋の周りをまわる。

この踊りには、男性は近づいてはいけないことになっている。しかし、例外的に数人の老人が踊りに加わることがある。老人は、二本のエランドの角に似せた枝を頭につけて女たちの踊りの輪にはいる。これは、一頭のオスの周りに複数のメスが群れているエランドの様子を描写したものである。

「エランド」を踊っている間は、少女と同じキャンプに住む男たちは大型動物の狩りに行かない。少女と動物は通じ合い、男たちは狩りに失敗するからだという。

ここで、再びナレの意味について考察する。ナレ（感応する）という動詞は、初潮儀礼において次のように用いられる。

- ① 儀礼中の少女が動物の名前を口にすると、動物は少女にナレして狂暴になる。したがって、儀礼期間中は、少女は動物の呼び名を変える。
- ② 初潮儀礼中は、動物が少女にナレして人間の動きを察知する。狩りの獲物は逃げ去ってしまう。
- ③ 女たちが集まって少女のために初潮儀礼の

ダンスを踊ってやると、動物は少女にナレして狂暴になり、人間に襲いかかる。

このように、ナレとは、人間と動物が相互に通じ合う回路を持ち、その回路によって感応し合うことである。この回路によって、人間は動物をなだめたり、動物から襲われたりする。

儀礼期間中の少女は、カミとも交流を持つ。少女が儀礼を守って、経血のついた砂の始末をしたり、皮の帽子を被り続けたりすると、カミは雨を降らせ、植物を実らせ、動物を太らせる。しかし、少女が儀礼を怠ると、雨雲は怒って通り過ぎ、カミは狩猟を成功させないという。

初潮儀礼は、思春期の少女の自意識を高め、感受性を鋭敏にし、少女が新しく生まれ変わることをめざしている。相互的な「感応しあう」世界において、少女の自然への意識は、そのまま自然から人間への意識として返される。少女の変容は自然からの応答でもある。人々は、少女の感受性を使い、少女の成熟とともに自然が豊穡になることを願っているのである。その意味で、ガイ/ガナの初潮儀礼とは、大いなる自然を「治癒」させ、彼らの生活世界を新生させるものなのである。

3-3 社会関係の軋轢

彼らは、一過性の腹痛や頭痛、怪我については、それぞれの症状に効く薬草を知っており、植物の根や葉を煎じたり、患部に塗ったりする。また、身体の悪い部分にカミソリで傷をつけ、出血させて治すという方法もよく用いられる。

しかし、体調不良が急激におきたり、あるいは長期間に及んだりした場合、人々は、この病気を社会関係の軋轢によって生じたのではないかと疑い始める。社会関係が原因の病気は「汚

れ(よごれ)」と「恨み」の大きく二つに分けられる。「汚れ」と「恨み」は、どちらも病気の原因とされるものであり、同時に病名でもあり、また、その病気を治すために行われる儀礼の名称でもある。

彼らの疾病観の中核にあるのは「汚れ」という概念である。男女の性関係に由来する嫉妬や愛憎、欲望によって、人間の身体は「汚れを持つ」という。その汚れによって、人は病気になる。そして、「汚れ」という病気は、しばしば複数の人々が同時期に発病する。そのメカニズムは次のように説明される。

グイ/ガナによれば、血、汗、尿、精液、唾液といった身体物質は、すべて同一のものである。「水」が形を変えたものである。「水」は具体的な血や尿のように目に見える形をとるものではない。「水」とは目に見えないパワーであり、抽象的な関係性のことでもある。

「水」のパワーは、まず、その生命を生み出す力にある。子どもの誕生は、男の水(精液)と女の水(粘液と羊水)が混ざり合うことによって始まると考えられている。「水」はすばらしい力を備えたものであり、人間は「水」という力の集合体である。彼らは「水」の力を肯定的にとらえている。

しかし、一方で「水」は人々を繋ぎ、そのことによって被害を拡大させるという作用も持つ。なぜなら、親子きょうだいといった親族、また、夫婦、愛人など性交渉をもった人々は、この「水」によって相互に繋がっている。過去に関係を持った人々も、現在においても「水」によって繋がっているという。そして、誰か一人でも、強い欲望や嫉妬を抱くと、その人の「水」が汚れるだけでなく、親子や夫婦、愛人といった「水」で連なる人々全体の「水」が、

一気に汚れると彼らは考えるのである。

「汚れ」という病気の症状は、愛人関係にある男女、および、それぞれの配偶者が激しい頭痛、腰痛で苦しむことあり、さらに、彼らの子どもたちが食欲不振、下痢などにより最悪の場合は命を失うといったものである。

「汚れ」の儀礼は、「水」で繋がる人々すべてが一堂に会しておこなう。全員の血や尿を混ぜ合わせたものに薬草を混ぜて「薬」を作り、この薬を各人の身体にカミソリでつけた傷口に塗りこめて治療が完了する。

彼らは、この治癒させる力は、「水」すなわち「身体物質」そのものにあると考えており、薬草の効果は副次的であるとみなす。

「汚れ」と相補的な関係にある「恨み」という病気は、年長者から年少者へ向けられた恨みや怒りが原因とされる。若者が、狩猟で得た肉を年長者に分けなかったり、息子が遠くの土地へ働きにいったきり両親に何の連絡もしなかったりした場合、両親や年長者たちが心を痛める。このような年長者たちの恨みや愛着によって、年長者たちの身体は「恨み」で満たされ、その「恨み」が若年を襲う。

病気としての「恨み」の症状は、若者が野生動物に襲われたり、交通事故にあったり、急に胸が痛くなったり、難産で命を落としそうになるなど多様である。

この病気(災難も含まれる)の治療のために開かれる「恨みの儀礼」では、年長者たち全員が集まって水で手を洗い、水に「手の汚れ」を溶かしこむ。人間の恨みや執着、すなわち欲望が、身体を「汚れを持っている状態」にするという。この「汚れ」こそが「恨み」のそもそもの原因である。人々は、病の原因物質である「汚れ」を水に溶かし出すことによって、「汚れ」を「薬」に変える。

次に年長者たちは丸く輪になって立ち、中心に「恨み」の病気に苦しむ若者を立たせる。そして、その「薬」の入った水を若者に降り注ぐ。さらに、若者にその水を飲ませる。このようにして、若者を病気から回復させる。

「恨み」は、アフリカに広く見られる「呪い」や「邪術」を連想させる。しかし、グイ/ガナの「恨み」は親族内の年長者から年少者へ向けられるものに限定されており、「犠牲者」である若者はけっして死ぬことはない。また、「恨み」を仕掛けた「犯人」を追及することもない。これらの点で、「恨み」は呪いや邪術とは異なる。

重い病人や怪我人が出ると、人々は、その人の行いや人間関係を省みて、その原因を特定しようとする。そして、原因に合わせて、「汚れ」あるいは「恨み」の儀礼をおこなう。

そのような原因が特定できない場合、あるいは、儀礼をおこなっても病気がよくなる場合、人々は、いよいよ、「カミの病気」を疑い始める。「カミの病気」とは、人々の理屈によって説明できない、もろもろの体調不良や事故のことである。この「カミの病気」に対して、人々はヒーリング・ダンスを開く。

4. ヒーリング・ダンス

4-1 ツィーとは

彼らの社会では、日常の歌や踊りはツェレエといい、とくにヒーリング・ダンスのことを「ツィー」と呼ぶ。また、歌い踊ることを、「ツィーを言い、ツィーを踏む」と表現する。そして、トランス状態になって意識を失うことを「ツィーにおいて死ぬ」と表現する。このことから、ツィーとは、歌や踊りによって通常とは異なる心理状態になることを意味すると想像

できる。

また、男性の成人式は、「男のツィー」と呼ばれ、女性の初潮儀礼を、「エランドのツィー」というので、ツィーとは儀礼のことでもある。儀礼中の若い男女が、カミや動物と「感応する回路を開くこと」は前述したとおりだが、儀礼中の一連の行為の中でも、人々が集まって歌い踊ることがツィー、すなわち超自然へ直接アプローチすることである。ツィーとは、「超自然的な力にかかわる概念（菅原、1993）」なのである。

ツィーは動詞として使われることもあり、ツィーの完了形であるツィヤーハは、「超自然世界に相通じる状態」を意味する。初潮儀礼中の少女、成人儀礼中の若者、そして、ヒーリング・ダンスのヒーラーになるための修行中の男性は「ツィヤーハ」であるという。

以上が、ツィーという単語の歌と踊りにかかわる原義だが、それから派生した用法がある。「風をツィーする」というのは、「妖術によって強い風をふかせる」ことである。また、「ツィヤーハ」は、「巧みだ」「精通している」という一般的な意味で使われることもある。

4-2 ダンスの経過

ヒーリング・ダンスは、日が暮れてから始まる。ダンスには赤々と燃える焚火が必要である。また、夜を徹して明け方までおこなわれる。

焚火の周りに10人ほどの女性たちが輪になって座り、まず一人が手を打ち鳴らしながら甲高い声で一つの旋律をうたう。ヒーリング・ダンスの歌には歌詞はない。即座に数人が相の手をいれ、旋律を重ねてポリフォニーが始まる。さらに、次々と女性たちが唱和し、手で複雑なリズムを刻み、歌声の厚みがましてくる。

やがて歌声が共振すると、うねりが生じる。うねりの渦はその場を包み込む巨大なカサのようである。

そうすると、男性の踊り手たちが一列になり、女性たちの背後で、砂に足を突っ込むようなステップを踏みしめてまわる。踊り手たちは、ダチョウの卵殻の破片を入れた繭を数十個、糸で数珠つなぎにして作った「ガラガラ」を脛に巻いて踊る。

ガイ/ガナの文化では、踊り手は男性と決まっているので、当然、ヒーラーは男性である。女性は弱くて邪悪なものに冒されやすいが、男性は強く、女性に取りついた邪悪なものを自分の身体に引き寄せ、さらにキャンプの外へ追い払うことができると信じられているのである。(ただし、別の言語グループであるクンやコーでは、女性のヒーラーも存在する。)

踊り手の汗は人を癒す「薬」であると考えられているので、踊り手たちは、腋の下の汗を手でぬぐっては病人に振りかける。また、「巧みな踊り手の身体から放射される「精气」を受けようと、女たちは踊り手の臍を掌でこすり、自らの頬になすりつける(菅原, 1993)。

4~5人の踊り手の中で、中心となるヒーラーは一人である。彼は、低いうなり声や、高い裏声を自在に出し、女性の歌い手たちが畳み掛けるように繰り返すリズムに乗って、ときにはリズムを先導して踊る。ヒーラーは、病人に手で触れたり、ゲムスボックの角を削って作った破片を病人に投げつけたりする。

ヒーラーの小刻みに動く脚の上下動と、腰から上の左右に揺れる動きがさらに大きくなると、ヒーラーは病人の患部に手をあててさらに激しくステップを踏む。このとき、ヒーラーは喘ぐような独特の声を出す。しばらくすると、ヒーラー自身も、また他の踊り手たちも次々と

失神する。

彼らは、意識を失ったまま焚火に倒れこむこともしばしばおこす。この状態を、先述したように「ツィーにおいて死ぬ」という。ヒーラーたちは、意識を失って砂に突っ伏したまま、しばらく身体を痙攣させている。

踊り手たちがトランスに陥っている間も、女性たちは途切れることなく歌をうたい続ける。彼女たちは、声を重ね合わせ、間髪容れずに手拍子を入れることに意識を集中させているが、中の数人の女性は、踊り手たちが火傷をしないように倒れこむ場所を空けてやったり、失神した踊り手をさすったり冷静に対処している。踊り手たちの数人は、すぐに意識を回復させて再び踊り出す。

こうして歌と踊りのクライマックスが充分続くと、突然女性たちは歌声をとどし、手拍子だけの掛け合いが数小節続いてピタリと終わる。完璧な静けさが、ほんの一瞬広がりかける間もなく、「ハハハハハハイ」とサン女性の特有のカラッとした笑い声が高らかに闇空に響く。人々は歌いきったという充足感に満たされている。このような歌の終わり方を、「枝がポッキリ折れるように歌い終える」と表現している。

一曲およそ一時間のダンスが何度も繰り返され、夜が白々と明けるまで延々と続く。

ヒーリング・ダンスは、特定の病人の治療を目的にしているが、病人だけでなく、ダンスに参加した人全員が癒される。ツィーによる癒しが共有されるのである。

このようなダンスの場を作り上げるためには、女性たちの歌声が重なり合い、互いに打ち合う手拍子のリズムがきまり、男性たちが踏むステップと歌がかみ合い、男性と女性の意識と身体が同調し合わなければならないのである。

「女性たちの歌声によってヒーラーはエネ

ルギーをもらう」とも表現される (Keeney, 1999)。

さらに、踊り手たちが邪悪なものを追い払うことで、「キャンプ中から悪いものがすべてとりはらわれて浄化される」(田中, 1971)のである。

現在のヒーリング・ダンスは、病人の治療を目的に人々を集めて開かれる場合が多いが、狩猟に成功して大量の肉がキャンプにもたらされたときに余興として始まったダンスが、そのまま治療に移行することもある。

楽しみや喜びの表現であるダンスと、治療を目的としたダンスは、一見異なっているようにも実は同根である。大猟によってもたらされた歓喜のダンスが、ヒーリング・ダンスの元の意味なのである。自然の恵みであり、同時に悪霊であるガマと感応し、対峙し、乗り越える狩猟の体験が、病気から人を回復させ、キャンプに平安をとりもどす原動力となっているのである。

しかし、近年は、ダンスの治療の面だけが注目されるようになった。町に住み、狩猟採集生活から遠ざかったサン人のグループには、その傾向が強い。また、ツワナやヘレロといった異民族の間で、サン人の治療のダンスは強力だという評判が立ち、サン人のヒーラーに現金を払って治療を頼む人も増えている。

また、一方、サンたちの中では、ヒーリング・ダンスは彼らが自分らしさを取り戻すアイデンティティ確認の場ともなっている。

4-3 歌の発生

彼女たちがうたう歌には歌詞がないことは先述したとおりだが、それぞれに曲名がある。私が調査していた90年代前後は、「ゲムスボックス」が好んでうたわれていたが、以前に流行した、「ハト」「ワイルデビースト」「スベル(意

味不明)」なども歌われることがあった。

また、私は1988年に歌の発生の現場に居合わせた。あるガナの男性が、自分が親指ピアノを演奏している夢を見た。その夢は、「人々がうたい踊っている傍らで、彼が親指ピアノを演奏しており、ガマがもっとうたえ、もっと踊れというので、彼は必至で演奏した」というものだった。夢から覚めた後に「歌だけが残り」、彼が親指ピアノで演奏していると、瞬間に人々に広まった。

男性たちは親指ピアノで演奏しながらうたい、別の場面では女性たちが合唱しながら女性だけでダンスを踊ったりしていた。そして、そのうちに、ヒーリング・ダンスにおいても、その歌がうたわれるようになったのである。曲は、どんどん変奏されていき、最初のメロディーとは似ても似つかぬ歌になったが、それでも、すべて彼の名前をとって「ギューベアの歌」といわれた。私は、いろいろな場面でうたわれた「ギューベアの歌」を集めたが、それは15種類に及んだ。

この例から、歌の発生には夢が関与し、その歌が、さまざまな場面で繰り返して人々にうたわれて共有されることで、ヒーリングの歌へと変わっていくことが想像される。

4-4 変身譚

ヒーラーは、しばしばライオンになることができるといわれる。それは、ライオンを「真似る」のではなく、ライオン「そのものに変身する(グイ/ガナ語でキュルと表現する)」というのである。ヒーラーは、踊りながら爪とたてがみが伸びてきて、人間とライオンが混ざり合った姿になって邪悪なものをキャンプから追い払うのだ。

人々がブッシュで遭遇するライオンには、人

間が変身しているものも混じっているという。

狩猟者であるサンは、ライオンに親しさと恐れというアンビバレントな感情を持っている。ライオンが倒した獲物を、横取りすることを専らにして「ライオンは俺の友人だ」と嘯く人が、今もグイやガナの中にいる。しかし、そうやってライオンと接触しながら、最期はライオンに襲われて人生を終えた人も大勢いるのである。

人間に肉を与えることもあれば、人間を殺してしまうライオンは、彼らが想像するガマそのものである。ヒーラーはライオンに変身することで、ガマと対等になろうとするのだ。

5. 考察

5-1 脱魂型と憑依型

シャーマンが超自然的存在に直接的に接触する仕方には大別して二つの型があるとされる。一つはシャーマンの魂が身体外に出て天上、地上、地下などを巡歴・飛翔する脱魂型であり、他は地上や他界の神霊・精霊がシャーマンの身体内に入り、これに憑依する憑依型である。二つの型について、エリアーデ(1974(1951))は、エクスタシーとポゼッションと呼んでいる。

最近では、エクスタシーは魂の身体からの離脱・移動を、ポゼッションは神霊・精霊の身体への憑依・移動を意味する用語として対語的に使用され、トランスは、エクスタシーとポゼッションが生起する前提または生起しつつある過程を指す用語として使用されることが多い。

シャーマニズム研究の通説によれば、脱魂型シャーマニズムは極北アジアの狩猟採集文に濃厚に発達しており、栽培民俗文化では衰微しているという(佐々木, 1984)。

グイ/ガナのヒーラーは、失神している状態

において、ガマと掛け合うことができるといわれている。彼の意識は、ガマのところへ行き、ガマと激しく口論する。ヒーラーとガマは対等であり、ガマに「文句を言う」ことで、最終的にガマの同意を得、病人を回復させる。

ガマが病人の治癒に同意すると、ヒーラーの痛みは解放される。彼が砂の上で痙攣するたびに、身体の痛みは振り落とされて消えていくという。

ガマは、世界観のところで述べたように、カミであり、悪霊である。病人を病から救うのは、上方にいるガマで、これはカミに近い。しかし、同時に病人の身体に取りついているものもガマだといい、これは地上にいる悪霊のようなものである。

いったい、ガマはどこにいるのか、一人ではなく複数存在するのか、また、ヒーラーはガマに何と口論するのか。私は、彼の説明を聞いて、疑問が次々わいてきた。しかし、彼は困惑の表情を浮かべて答えなかった。答えたくないようでもあり、自分の体験を言葉にできないようでもあった。

私は同じ質問を、別のグイやガナのヒーラーに尋ねてみたが、統一した見解は見いだせなかった。

グイ/ガナの例から、脱魂型と憑依型という分類が、シャーマニズム研究に意味をなさないのではないかと考えられる。

5-2 シャーマンの身体技法

ヒーラーは専門職ではないが、踊りが得意な者が経験を重ねることで、次第に自他共に認める治療者に成長していく。修行期間中のヒーラーは数種類の動物の肉を食べない。ヒーラーは病人に取りついた「悪霊」を自分に乗り移らせ、また「カミ」と語ることができるよう鍛錬

を積む。

私はある一人のヒーラーのダンスに何回も参加し、また、彼自身の体験について数回質問することができた。彼は普段はハンターであり、また、親指ピアノの演奏が得意なミュージシャンであり、親指ピアノを製作する楽器職人でもある。

ヒーリング・ダンスの始まりのときの彼の呼吸は独特である。彼は踊りの輪からはずれてしばらく一人で立っており、肋骨を一つずつ動かしてゆっくりと息を吸う。これは、「ブッシュの向こうから息を吸いこんでいるのだ」と彼はいう。それから、女性たちの歌声に合わせてステップを踏み始めると、脛に巻きつけているガラガラが、それ自体が一つの生き物であるかのように鳴り響く。そのガラガラの鳴動をきっかけに、彼の足が勝手に震えだし、その震えが踵から腰まで上がってくるという。さらに、背骨を伝って脳底まで震えが上がると、彼はこの振動を痛みとして感じるようになる。

この状態で彼は病人を触る。彼は、自分の意識を病人に集中させ、彼と病人が同じ人間であるかのように呼吸を同調させる。彼と病人が一体になることで、病人の身体に取りついた「邪悪なもの」を自分の身体にのり移らせる。病人から刺すような痛みが入ってきて、彼はその痛みを耐えながら吠えるように叫ぶ。「邪悪なものが身体に満ち満ちた」結果、彼の身体は死んだようにその場に倒れこんでしまう。

そもそも、ヒーラーのトランス体験は、個々人によって異なるようだ。

トランス状態へ入るきっかけについて、先述したヒーラーは「ガラガラの振動が踵から上がってくる」といったが、別のヒーラーは、「踊っているうちに、頭の方から痛みと熱さが入ってくる」と表現した。

ボツワナ北部からナミビアにかけて分布するクン・サンの場合は、踊っているうちに「沸騰するような熱いエネルギー」がヒーラーの身体を中心に生じ、そのエネルギーを他のヒーラーや病人と交換するという。また、ヒーラーは、過度の熱さと痛みによって死の恐怖を感じる、これを克服しなければヒーラーになれない(Katz, 1982)。

さらに、ガイ/ガナより南に住む別の言語グループのサンの中には、「雷に打たれたような痺れと光が自分の身体を通り、光によって、病人の身体の中が透けて見える」と表現する人もいる(Keeney, 1999)。

ダンスによってトランスに入り、病人を治すという粗筋は決まっていますが、トランスに入るきっかけや、治療している間の体験はさまざまである。それぞれのヒーラーが独自の鍛錬によってトランス状態に自在に出入りし、カミや悪霊と対峙できるような「治療へ至る身体技法」を獲得するのである。

おわりに

ガイとガナは、人間の病気や災難という不幸を、「汚れ」や「恨み」という人間側の問題として解決しようとしているが、同時にトランス・ダンスによってカミと直接対峙する方法も確立させてきた。彼らは、薬や手術もおこなわずに、歌と踊りで病気を治すという独特の身体技法を発達させている。

彼らと一緒にブッシュを歩くと、草の色、鳥の声、雨雲の匂いなどさまざまな自然の兆候に、彼らがつねに気を配っていることがよくわかる。また、身体の状態を把握し病人を診断する際に嗅覚をよく使う。ヒーリング・ダンスの場では、歌声とダンスによる聴覚と振動を感じ

る皮膚感覚と深部感覚, また, 焚火の光と暗闇のコントラストによる幻惑的な視覚など, あらゆる感覚器官を総動員している。

彼らは, 超自然的存在と感応する回路を開いている。さらに, 夢に代表されるような潜在意識にまで想像力を広げている。感覚を鋭敏にし, 意識的な呼吸をおこなうことで, 身体と意識を拡張させる。彼らは, このようにして神と出会い, 神と対決し, 災難や不幸を乗り越えてきたのである。

付記: この論文は, 2008年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。

引用文献

- 今村薫 2010『砂漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』どうぶつ社
- エリアーデ, M. 1974『シャーマニズム—古代的エクスタシー技術—』冬樹社 (Eliade, M. 1951 *Le Chamanisme et les techniques archaïques de l'extase*, Paris: Librairie Payot)
- 佐々木宏幹 1984『シャーマニズムの人類学』弘文堂
- 菅原和孝 1993『身体的人类学—カラハリ狩猟採集民のグアイの日常行動』河出書房新社
- 菅原和孝 1996『狩猟採集民の宗教的世界と自然観—アフリカ南部グイ・ブッシュマンの社会より』, 有福孝岳編『現代における人間と宗教—何故に人間は宗教を求めるのか』京都大学学術出版会, 29-59頁
- 田中二郎 1971『ブッシュマン—生態人類学的研究』思索社
- 田中二郎 1978『砂漠の狩人—人類始源の姿を求めて』中央公論社
- 田中二郎 1994『最後の狩猟採集民—歴史の流れとブッシュマン』どうぶつ社
- Katz, R. 1982 *Boiling Energy*, Harvard University Press
- Keeney, B. 1999 *Kalahari Bushmen Healers*, Ringing Rocks Press
- Shirokogoroff, S. M. 1935 *Psychomental Complex of Tungus*, London: Kegan Paul, Trench Trubner & Co.